

英語が使える生徒の育成を目指した授業実践 ～アメリカでの人的交流とアメリカで学んだ教授法を生かして～

須田 香 織

はじめに

OECD（経済協力開発機構）のPISA調査や、IEA（国際教育到達度評価学会）のTIMSSなどの調査結果を踏まえて検討された平成20年1月中央教育審議会答申に基づいて、平成24年度には新しい学習指導要領の本格実施がスタートした。英語科としての大きな変更点といえば、授業数週3時間から週4時間に増加されたことと、「聞くこと」「話すこと」「書くこと」「読むこと」の4技能をバランスよく総合的に、そして統合的に（読んで話す、読んで書く、または、聞いて書く、話すといった複数の技能を組み合わせること）指導することが求めていることである。これらを踏まえて、平成23年6月には文部科学省より「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的な施策」が出され、一層の英語教育への期待が高まりつつある。

国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的な施策（概要）

基本的考え方

- 1 英語力の向上は、教育界のみならずすべての分野に共通する喫緊かつ重要な課題
- 2 求められる英語力は、例えば、
 - ・臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度
 - ・相手の意図や考えを的確に理解し、論理的に説明したり、反論・説得したりできる能力 など
- 3 新学習指導要領の着実な推進は、我が国の国民の英語力向上のための基本
→ 平成28年度の達成を目指した社会全体を挙げての5つの提言

提言1：生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する。

〈具体的施策〉

- 国や教育委員会、学校は外部検定試験を活用し生徒に求められる英語力の達成状況を把握・検証。
※学習指導要領に基づき達成される生徒の英語力 中学校卒業段階：英検3級程度以上 高等学校卒業段階：英検準2級～2級程度以上
- 国は、国として学習達成目標をCAN-DOリストの形で設定することに向けて検討。
- 学校は、学習到達目標をCAN-DOリストの形で設定・講評し、達成状況を把握。

提言2：生徒にグローバル社会における英語の必要性について理解を促し、英語学習のモチベーション向上を図る。

〈具体的施策〉

- 教育委員会や学校は、企業の協力を得て、生徒に英語を使って仕事をしている現場などを見せる。
- 国や教育委員会は、高校生の海外留学を推進。
→18歳の時点までに中長期の留学ないし在外経験を有する者の3万人規模への増加を目指す。

提言3：ALT、ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす。

〈具体的施策〉

- 国は、ALTの活用実態を把握するとともに、授業外におけるALTの活用方法やICTを用いた海外との交流学习・協働学習などALTやICTの効果的な活用に関する情報を提供。
- 教育委員会は、優秀な外国人教員などの採用を推進。→600人の採用を目指す。
- 国は、民間人材や教材、指導事例など、英語教育に関する情報を掲載したポータルサイトを構築。

提言4：英語教員の英語力・指導力の強化や学校・地域における戦略的な英語教育改善を図る。

〈具体的施策〉

- 国は、英語教員に求められる英語力についてその達成状況を把握・公表。
※英語教員に少なくとも求められる英語力：英検準1級、TOEFL (iBT) 80点、TOEIC 730点程度以上
- 教育委員会は、英語教員採用の際、外部検定試験等を活用し、英語教員に一定の英語力を求める。
- 教育委員会は、地域の戦略的な英語教育改善のための拠点校を形成 →250校程度を目指す。
- 国は、国際バカロレアレベルの学校やスーパーサイエンスハイスクールなどの先進的な取組を推進。

提言5：グローバル社会に対応した大学入試となるよう改善を図る。

〈具体的施策〉

- 国は、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」を総合的に問う入試問題の開発・実施を促進。
- 国は、AO入試・一般入試等においてTOEFL・TOEIC等の外部検定試験の活用を促進。

本研究では、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的な施策」の提言2, 3を受けて、生徒の英語学習へのモチベーション向上につながる取組と視覚的教材を活用した授業の実践例を紹介する。

2. 授業の実際

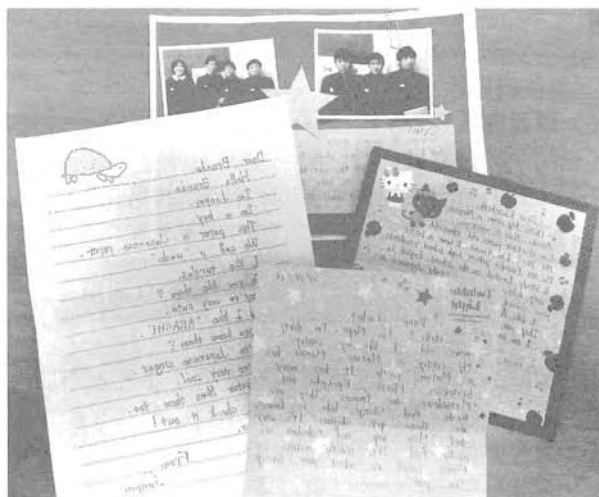
(1) 生徒の英語学習へのモチベーション向上につながる取組

① アメリカの生徒と本校生徒との交流

私は、平成24年度に日本人若手英語教員米国派遣事業に参加した。文部科学省のHPには以下のように示されている。

本事業は、2010年11月に横浜で開催されたAPEC（アジア太平洋経済協力）首脳会議の機会に行われた菅総理（当時）とオバマ大統領による日米首脳会談後に発出された「日米同盟深化のための日米交流強化」の主要事業の一つである。日米同盟の深化・発展のための国民の幅広い層における相互理解の促進を主な目的としている。若手英語教員を米国に派遣し、英語教育の教授法を学ぶとともに、米国での人的交流やホームステイを通じて米国の理解を深め、英語教員の英語指導力、英語によるコミュニケーション能力の充実を図る。これは、中長期的な視点に立てば、日米同盟の深化・発展のための国民の幅広い層における相互理解の促進にも資するものである。

アメリカでの実施研修の際に、アメリカの生徒に日本からの手紙を渡す機会があった。それまでカルタや武道の実演などで盛り上がっていた教室が、日本からの手紙を渡した途端に静まり返り、アメリカの生徒は食い入るように日本からの手紙を読み始めた。その後、新しい友のことを考えながら、一生懸命に返事を書く姿が伺えた。その手紙を手にした本校の1年生の生徒は、何が書かれているのか、なんとか理解しようと辞書を引いたり、友達に聞いたりしていたようである。私が日本に帰ってからも、現地の先生と何度かメールのやりとりをして、現地の生徒が再び返事を待ちに待っていることが分かった。英語が苦手な生徒も得意な生徒も関係なく、多くの生徒



が進んで手紙を書いた。この文通プロジェクトも今年度で3年目を迎えた。2年生は、1年時からこの活動をしており、次第に相手が何を伝えたいと思っているのか理解できるようになったり辞書を引きながら自分が伝えたいことを書くことができるようになったりすることに喜びを感じている。また、授業では学ぶことのできない生の文化を感じることもできる。クォーターや1ドル紙幣を送ってもらったことで、アメリカの物価に興味を持ち始めた生徒や、お菓子を



送ってもらったことで、アメリカの食や学校の仕組みやルール（お菓子は食べられるのか、教科書であったように本当にカフェテリアはあるのか）などに興味を持ち始めた生徒もいる。この活動を通して、英語はただ学ぶだけのものではなく、使うために学習をしていると考える生徒が増えたことが有難いことである。「話したい相手がいる話したい内容があるから英語を使う。」これこそコミュニケーションを通して人と人とのつながりを育てている瞬間だと実感する。

② ビデオ電話を活用した授業

New Horizon 1には、アメリカの学校の様子を紹介した単元がある。教科書の中だけではなく、実際のアメリカでの生活を感じてほしいという願いも込めて以下のように単元を構成した。

展開計画（全9時間）

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	附属中の生活・私の学校生活を紹介しよう	1 2 3 4 5	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクチャートークをする。（写真の情報を活用して、学校生活を紹介する。聞き手は話し手のことをさらに詳しく知るために質問をする。） ・疑問詞を含む文の意味・構造および、その運用について理解する。 ・自分の学校生活を紹介するポスターを作成する。 ・相手をよく知るためにポスターを使って、Q&Aをする。
2	アメリカの実生活を調査せよ！	6 7 8 9	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクチャートークをする。（写真の情報について紹介する。聞き手は話してのことをさらに詳しく知るために質問をする。） ・アメリカの生活について知りたいことを班でまとめる。 ・テレビ電話を使って、質問する。 ・新聞にまとめる。

質問した生徒のふりかえりには、次のようなことが書かれていた。「本物の英語で聞き取りにくかった。」「アスリートがどうしても伝わらなかったのもっと正しい発音を身に付けたいです。」「いつものピクチャートークとは全然違って緊張しました。でも、相手に通じたので本当に嬉しかったです。」

(2) 視覚教材（絵や写真）の効果的な活用方法

カリフォルニア大学アーバイン校でのTESOLプログラムでは、視覚教材を取り入れた活動が多く紹介され他と同時に、先生の授業も必ず視覚教材を取り入れた授業が展開されていた。

現在、多くのテレビ番組で流すテロップや、テレビゲーム、インターネットの普及などが影響し、多くの生徒が視覚からの入る情報処理に長けている。言い換えると、聴覚から入る情報だけでは、聞き漏らしがあり、学習や学校生活に困り感を抱いている生徒も少なくないことが予想される。このような現状を考えると、視覚教材を効果的に活用することが、英語学習にも必要だと言える。もちろん、聴覚からの情報処理能力を高める指導も併せて考えていかなければならないのも事実であるが、今回は、どのような場面で視覚教材を取り入れると生徒のコミュニケーション能力の育成につながるのかについて述べたい。

次に挙げるのは、視覚教材（絵や写真）を用いる利点である。

- ・印象に残りやすく、長期の記憶に役立つ。
- ・生徒にとって場面や状況がイメージしやすくなり、教師が説明する時間が省け、言語活動に充てる時間が増す。
- ・生徒が日本語を聞く機会が減る。
- ・目に見える情報から、目には見えない想像の世界を刺激し、クリエイティブに物事を考えることができる。

渡米以前の私は、インターラクティブスピーチ（まとまりのある文章でスピーチされたことに対して、聞き手が即興で質問をし、話し手がそれに答えるプレゼンテーション的役割をもったスピーチのやり方）を軸にして、年間指導計画を立て、授業実践をしてきた。生徒は、自分のことを他に伝え、相手を理解するために、語彙を増やし、基本文をひたすら覚える作業してから、それを実際の場面で使えるように活動に取り組んでいた。暗記の部分に時間をかけずに活動でたっぷり時間を使うやり方は、一見効率的に思われるが、語彙や基本文の定着・習得においてもコミュニケーション的な方法で指導する方が、生徒が英語にふれるという点で望ましいと考える。よって、渡米前の授業内容を以下のように変えていくことで、絵や写真を使う利点を最大限に活用し、週4時間という限られた英語の授業を実際のコミュニケーションの場として、コミュニケーション能力の育成役立てたいと考えた。

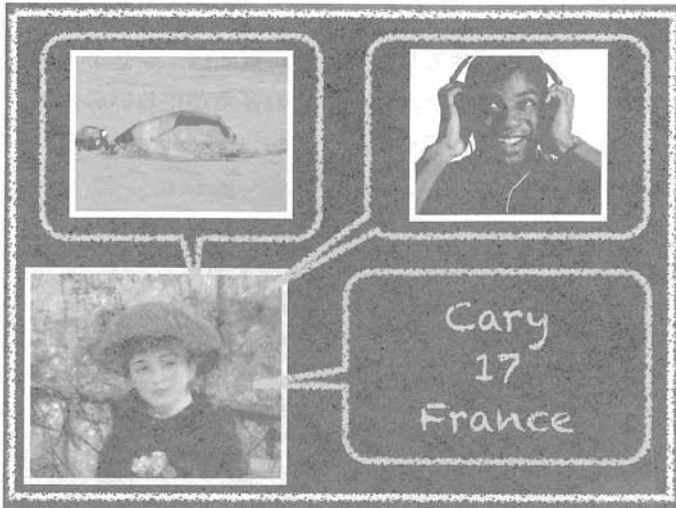
○ 語彙や基本文をひたすら覚える作業→語彙数の充実化を図り、単語や文を活用する活動

日本語訳を行わずに、絵や写真を提示して文脈から意味を推測させるように、新出単語を含んだ文や新しい文法事項を含んだ文をどのような場面でどのように使うのかを教える。

その後、生徒は写真を見て状況を考えながら自分で文を作っていく。

○ 描写する活動

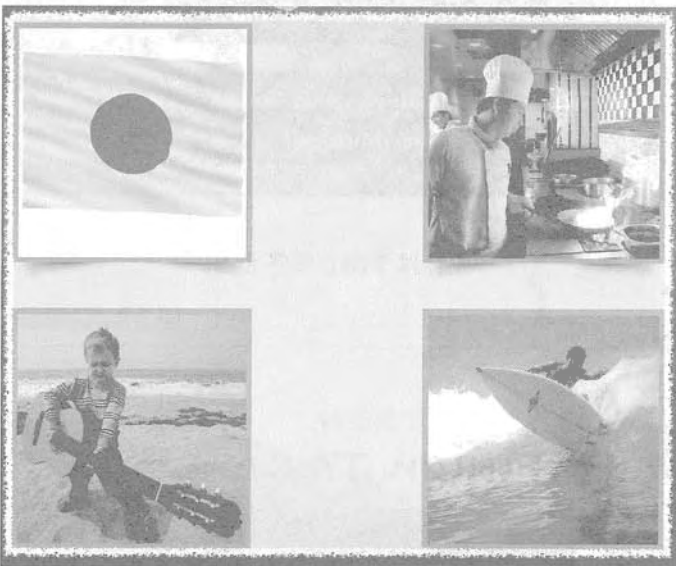
写真や絵を見て、人やものを描写する活動を新しく取り入れた。はじめは1文から始め、徐々にまとまりのある文章を言えるように指導し、3年時には 絵や写真を見て、自分で物語を作ったり、自分の好きな本や映画、ドラマなどについてあらすじを述べたりできるようにしたいと考える。



(活用例)

1. 自分（一人称）のこととして表現する。
2. 第三者（三人称）として表現する。
3. 写真の情報を介して、ペアで質問をする。


(Yes/ No Question, WH question)



(活用例)

1. 自分の情報としてペアに伝える。
2. ペアの情報として尋ねる。
3. 写真の情報を介して、ペアで会話をする。

(Yes/ No Question, WH question)



It's green, round, sweet.
I sometimes eat apples.
My mother cooks apple pie. 1年生

I went to the farm to pick
apples yesterday.
I like apples because they are
tasty. 2年生

This is the fruit that I like the best.
I've never eaten green apples. Red apples
are popular in Japan. 3年生

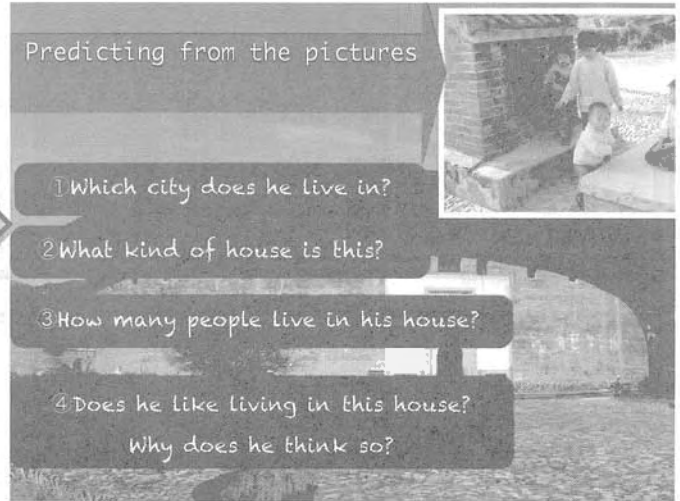
このように、同じ絵や写真でも目的を変えたり、使う場面を変えたりするといろいろな表現ができる。

○ 予測してから読む活動

- ① 物語や説明文を読む前に、関係のある写真を見せて質問をする。質問は、予想でも解けるようなものを選ぶ。一旦、自分が予測をしているだけに、自分の答えが正しいのか気になる、答えを見つける目的のために読む意欲が湧いてくる。



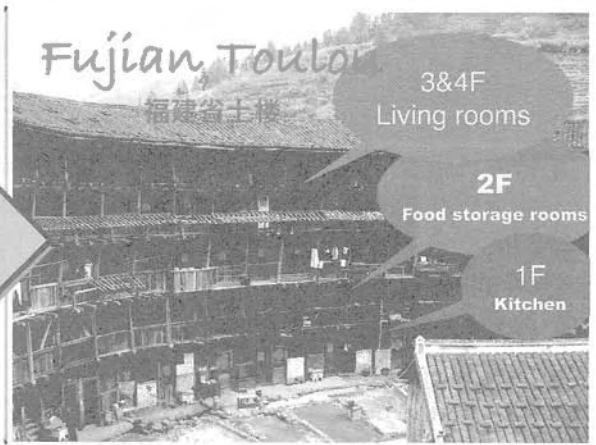
New Horizon 2年生の教科書
福建省の「土楼」について



生徒は予測して答える。



「土楼」について書かれている文章を読む。


















ヒントになる説明を聞く。

- ② 物語に関連のある絵を見て、生徒が物語を作る。その後、本当の物語を読む。1と同じで、自分が物語を作っているから、実際の物語はどんなものか知りたくなるから読む意欲につながる。

















イラストに合うように、ナレーションをつけてみよう！(1文を目安に作ってみよう)

Class () No () Name ()

絵を見て、物語を作る。



 1 Jack and Ann are married. They are not happy together. Why not?	 2 They are very different. Jack smokes. Ann doesn't smoke.	 3 Jack likes to watch baseball on TV.	 10 Now Ann lives in the house next to Jack.	 11 In his house, Jack can watch baseball on TV.	 12 He can smoke.
 4 Ann doesn't like baseball.	 5 Ann likes loud music.	 6 Jack doesn't like loud music.	 13 He can snore.	 14 In her house, Ann can listen to loud music.	 15 She can sleep.
 7 Jack snores at night. Ann can't sleep.	 8 One day, Ann looks at the house next door. It is for sale.	 9 Ann buys the house and moves in.	 16 Now Jack and Ann are married and happy!		

自分の書いたものと比べながら、物語を読む。

英語は言うまでもなく、コミュニケーションを図るための道具である。道具を適切に使う源になるのは、生徒一人一人のモチベーションである。読む必要があるから、読みたいと感じるから読むといったモチベーションを刺激する活動を繰り返すことで、生徒の力は育っていくと考える。今行っている活動に少しだけ手を加えるだけで、生徒は読む活動に意欲的に取り組めるようになる。

(3) Can Do Listの提示

今までの年間指導計画とは違い、生徒が見通しをもって学習に臨めることで、学習意欲が増し自分で考えて行動するという目的のもと作成し、その中には、どんな力がつくのか、どの時期にどんな学習をして、どのように評価されるのかを明記する。生徒はそれに基づいて自分の目標を立て、学習を振り返る機会とする。

帰国後のはじめの授業で、次の(2)に挙げる帯活動について説明をした。そこで、活動の目的と目標、そして、評価基準、テストの日程と内容を伝えた。一回目のテストを終えた後にアンケートを行い、以下のような結果が出た。

項 目	とても そう思う (%)	そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全く 思わない
どのように評価されるのかが分かると安心だ。	50.7	26.8	16.4	3	3
どのように評価されると分かるとやる気が出る。	50.7	34.3	12	1.5	1.5
終わった後に、次に自分で何をすればいいのかが分かる。	41	35	16	6	1.5
テストの日が分かると安心だ。	65	18	9	4.5	3
テストのために自分で準備をした。	18.4	43	24.6	7.6	6.1

約75%の生徒が、テストが終わった後に、自分の取組をふり返り、何をすれば良いのかが分かると回答した。これは、帯活動をする前に、どんな目的でこの活動をして、どんなテストをするのか、どのように評価するのかを示していた結果だと考える。課題としては、7.5%の否定的な回答をした生徒への支援である。アンケートの後、数名の生徒に聞き取りを行ったところ、英語に苦手意識をもっていて、何をどのように学習すればいいのかが自分ではどうすることもできないと答えた生徒と、テストでAをとったが、さらにどうすればもっと力が伸びるのかが分からないと答えた生徒の2通りに分かれた。前者の生徒には、ペア活動や班活動を通して、友だちとともに学び、真似ることから始めさせ、できた・できるといった成功体験を多く積ませ、自己肯定感を育てつつ、基礎基本を身につけさせる指導を繰り返す必要がある。後者の生徒には、より高い目標や創造的な課題にも取り組ませ、達成感を味わわせ、自分の力が伸びることを実感させたい。また、全ての生徒にとって、より具体的な目標をもたせるためにも、評価規準を示し、自主的に学ばせつつも、ペアや班活動または、クラス全体で学び合える課題を設定したい。

参 考 文 献

「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的な施策」

平成23年6月30日外国語能力の向上に関する検討会

(すだ かおり 英語科 k.a.suda@edu.shimane-u.ac.jp)